

笹川科学研究助成を受けて

奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科

バイオサイエンス領域

山口 暢俊

2008 年度に私は「シロイヌナズナの post-meristematic な花序形態形成におけるオーキシンと *LFY* 遺伝子の機能」というテーマで、博士課程 3 年のときに笹川科学研究助成に採択していただきました。私にとってははじめて採択された研究助成で、採択の通知を受け取ったときや、ANA インターコンチネンタルホテルで研究助成の採択式に参加したときのことは今でもはっきりと覚えています。その笹川科学研究助成の採択も、欠員が出れば採択できるといういわゆる補欠合格で、何もかもが順風満帆という研究生生活の始まりでは決してありませんでした。これから研究者を目指す若い方々の中には、現時点で他の研究者と比べて「業績」「学歴」「英語力」などが劣っており、研究者としてやっていけないんじゃないか？と不安に思っている方もいると思います。大切なのは自分の長所を少しずつでも伸ばしていくことです。その際に、笹川科学研究助成のような萌芽的な研究を支援する制度を活用して、自身の研究をより発展させることが最も重要だと思います。

さて、私は修士課程のときから、植物の花がどのようにして作られるのか？ということに興味を持って研究をしています。特に、平成 30 年度の文部科学大臣表彰の若手科学賞をいただくきっかけとなった「植物の花の運命を決める遺伝子ネットワークの研究」の解析を行おうと考えたのは、笹川科学研究助成で *LFY* という遺伝子の解析をはじめたからでした。博士号を取得した後に、米国ペンシルバニア大学で博士研究員となり、*LFY* という花の運命を決める遺伝子の働きを調べました。そして、*LFY* がどのようにして働きはじめるか？*LFY* が次にどの遺伝子に働きかけるか？という遺伝子が働く順序を明らかにしました。

私がこれまで研究を続けることができた理由の一つは、笹川科学研究助成を受けることができたからです。貴財団によるご支援に深く感謝します。これからも笹川科学研究助成が、多くの若手研究者の萌芽的な研究を支えてくれるだろうと期待しています。